

聖ヨハネ福音書第16章12節～15節

於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

教会の暦は、降臨節から始まった前半で、イエスさまの救いの出来事を一つ一つ祝ってきました。誕生から洗礼、悪魔の試み、受難、死、復活、昇天、そして聖霊の降臨というイエスさまのみ業を通して行われた神さまの救いの出来事を追いながら、記念してきました。先主日の聖霊降臨日で、この前半が終わり、今日からは教会暦の後半、聖霊降臨後の期節に進んでいきます。その最初に三位一体主日を祝います。

三位一体主日は、イエスさまの救いの御業を祝うのではなくて、神さまが三位一体の方であるという、教会の教えについて祝うことが主題になっています。教会暦の中では大変ユニークな主日であるということができると思います。

三位一体の神さまという教会の教えについては、教会の歴史の中で激しい論争が繰り広げられてきましたし、難しい哲学的な用語が用いられて説明が行われてきたので、理解することが困難なテーマであるという印象がぬぐえませんが、教会が神さまという方は三位一体のお方だと理解するようになったのは、何も頭の中でよくよく考えてみた結果、そのような結論に達したということではなくて、神さまの救いのみ業を体験したときに、その経験を振り返ってみて、神さまがどのようなお方であるかが分かって、それを三位一体の神と言い表したのです。

それでは、神さまの救いのみ業というのは、どのようにして行われるのでしょうか。わたしたちもそれぞれが救いを体験して洗礼を受け、信仰生活を送っているわけです。ですから、わたしたちも救いを体験したときに、そこに三位一体の神さまが働いておられることを経験したはずです。そのような救いの経験の一例として、今年4月に逝去した作家の井上ひさしが洗礼を受けたときのエピソードをお話したいと思います。

井上がカトリックの養護施設、昔は孤児院と言いましたが、そこで育てられたことは有名な話です。その養護施設の院長をしていた修道士は、井上ら少年たちに父親のように慕われていました。少年たちが、この院長に傾倒するに至ったのには、ある理由があったからです。

それまでは、少年たちは院長の言うことなど、特にイエスさまの話などは鼻の先でせせら笑って、真面目に聞こうとはしませんでした。それが、ある事件をきっかけに大きく変わってしまいました。

朝鮮戦争が始まった年のことです。当時、少年たちは日曜ごとに、進駐軍のキャンプに食事をしに行くことが許されていました。修道士たちがそのために奔走してくれたために、また、進駐軍の司令官の好意によって実現したことでした。GIたちの食事が終わる頃を見計らって食堂に入り、残り物を手当たり次第、ガツガツと食べるわけです。

その年の夏のある日曜日のお昼過ぎ、少年たちがいつものように進駐軍の食堂で食いだめをしていると、突然パーンと音がしました。若いGIが天井に向かってピストルの引き金を引いたのです。

そのGIが所属する部隊が、間もなく朝鮮に出兵することになっていたことや、蒸し暑い日だったことなどで、いらついていたためでしょうか。また、いがぐり坊主の子どもたちがガツガツ食べているのを見て、不機嫌になったことも、引き金を引く理由だったかも知れません。

ピストルの音に驚いて、泣き出した少年がありました。GIは、大きな声で何かを喚きながら、その少年に向かってピストルを向けました。その時、院長の修道士がナプキンを置いて静かに席を立ち、その少年をかばってピストルの真ん前に立ちました。修道士とGIとの間に短い会話があつて、間もなくMPがやってきてGIにピストルを捨てさせました。修道士は泣きじゃくる少年を連れて食堂を出ていきました。こんな事件です。

「イエスさまが全人類を救うためにいのちを投げ出された。それがキリストの愛です」と説く修道士の言葉など、おとぎ話のようにしか聞いてこなかった井上ら少年たちです。それが、突然、目の前で、ピストルの銃口の前にキリストの愛が表れたのです。おとぎ話のように聞いていたことと、その愛の真実の姿が、一つの現実になったことを経験するのです。その秋、少年たちの多くが受洗をしました。井上も勿論その一人でした(『生と死の弁証法』)。

少年たちは、戦後の厳しく貧しい生活の中で、それぞれ理由があつて家族と別れ別れになって暮らさなければならない状況にありました。何も信じられないような少年たちには、愛などという言葉は自分たちには最も縁のないものだと思います。ところがその少年たちを庇って銃口の前に立ちだかってくれた人がいた。その勇気ある行為を通してキリストの愛を体験したのです。自分たちが愛されていることを知ったのです。

井上ひさしは、そのような愛の知り方についておもしろいとえて説明しています。進駐軍の食堂で、少年たちの最も人気のあつた食べ物は、パンとバターとそれにアイスクリームでした。特にアイスクリームは、それを口にするまでは、少年たちは「アイスキャンデーの上等なやつさ」、とタカをくくっていました。ところが実際、口にしてみてビックリ仰天するのです。アイスキャンデーは口の中でぐしゃぐしゃと碎けてサッカリンの小狡い甘い味を残して喉の奥へと消えていってしまうだけです。だが、アイスクリームは違っていました。咬むといちいち歯を柔らかく跳ね返し、その甘みは清らかで食べ物としての個性を堂々と維持しながらお腹の中に落ちていく。アイスキャンデーのように他愛ない甘み付きの水にならないところに感服するのです。アメリカ映画で見ていたアイスクリーム、『リーダーズ・ダイジェスト』で読んできたアイスクリームとは、これだったのかと興奮して仲間と喋り合うのです。

少年を庇った修道士が、その話を聞いてこう言います。「生きるとはそういうことです。わたしたちは、まず、名前を覚えます。その正体が分からないままにです。ところがやがてどこかでひょっこりとその正体と巡り会います。

名前と正体がしっかり結びつくと、わたしたちはとても幸せになります。そういう幸せを探して歩くことがわたしたちの一生です。」

愛という言葉だけしか知らなかった少年たちが、愛の真実に巡り会う出来事を経験することで、愛の本当の味を味わうのです。「キリストの愛」という名前とその正体が、ぴったりと一つになる経験をするのです。

今日の福音書の初めに、イエスさまは弟子たちに、「まだ言いたいことがたくさんあるが、今は、あなたがたには理解できない」と言っています。この「理解できない」という言葉を、ある翻訳では「ついてこれそうもない」と訳しています(柳生訳)。イエスさまは、別れを前にして弟子たちにもっともっと多くのことを教えておきたかったのでしょう。

しかし、弟子たちには、イエスさまの教えを受け止めるキャパシティが満杯になってしまっていて、もう、ついていくことができなくなってしまっているのです。イエスさまの教えというのは、知識を詰め込むというのではありません。イエスさまの十字架を前にして、これから起こることが神さまの人間に対する御心の現れであることを分かってもらいたいという、切なる願いでした。しかし、弟子たちにはついていくことができないのです。

その弟子たちが、そのイエスさまのみ言葉を悟ることができるようになるのは、真理の霊、即ち聖霊が、イエスさまの願いによって父なる神さまから遣わされる時です。聖霊は弟子たちにイエスさまのみ言葉を思い起こさせて御言葉の真実を悟らせてくださるのです。言葉と真実が一つになる、それが聖霊の働きです。

イエスさまは、「父が持つておられるものはすべて、わたしのものである」と言われました。今日の福音書の一節です。父なる神さまとイエスさまが一体であることを強調しておられます。父なる神さまの持つておられるものとは何でしょうか。それは、わたしたち一人一人に対する愛です。その父なる神さまの愛にわたしたちをあずからせてくださるために、イエスさまはゲッセマネの園で、「アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」(マルコ 14:36)と血の汗を滴らせながら祈られたのです。それは父なる神さまの愛を、イエスさまがそのすべてを受け止めて、イエスさまに属するものに命を与えるためでした。

人間の命に無関心ではいられない神さまの愛の実現のためにご自身を捧げる決意を示されたのが、イエスさまの、「しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」という、この御言葉です。

銃口の前に立ったあの修道士の行為は、咄嗟のことだったかも知れませんが、しかし、その行為を通して、少年たちは口先だけではなく、真実をもって自分たちが愛されていることを知ったのです。聖霊が働くときに、わたしたちはイエスさまを通して神さまの愛の真実を悟り、神さまの命にあずかることができるようにされるのです。

このようにして、わたしたちは三位一体の神さまが救いの出来事の中で働いておられることを知るのです。主に感謝。

